

「ターニングポイント」

新田真士

受験勉強で苦しんでいた当時15歳の私。もしあの古びたラジオがなかったら、きつと乗り越えられなかった。もしあの声が聴こえてこなかったら、きつと今の自分は存在しなかった。そう確信をもって言える、まさに原点とも言うべき出来事が私にはあります。私が生まれ育った島根県の奥出雲地方は、山と川、そして一面田園風景が広がる村と呼ぶにふさわしい場所。夜には獣の鳴く声が聴こえ、当時は街灯もほとんどありませんでした。し、今でもケータイの電波は不安定です。今から26年前、当時とにかく勉強が出来ない劣等生だった私は、受験勉強に励も一向に成績は上がらず、不合格の文字がちらつき出していました。そして未来に対して悲観していました。目を逸らしたくなる現実。自分だけが苦しんでいるのではと錯覚するほどの

孤独な夜。

そんな混沌とした無明の生命に、一条の光を  
与えてくれたのがラジオでした。否、同じ時  
間を過ごす生きた声でした。

生放送のラジオ番組。テレビでは感じられ  
ない、そこにいる一人に対して語り掛けられ  
る声。「受験頑張つてね！」「一緒に乗り越  
えよう！」別の受験生リスナーからのお便り  
に、励ましを送るパーソナリティー。関西圏  
の番組に、まさかこんな片田舎の一人の中学  
生が勇気をもらっているなんて、本人は思い  
もよらないだろうな。そう思いながら、次第  
に顔を上げ前を向いている自分がそこにはい  
りました。

知らない誰かが、安堵する暖かさをもらっ  
ている。知らない一人が、一歩進む勇気をも  
らっている。今でも私は、あの時の出来事を  
大切にしながら、この瞬間もマイクに向かっ  
ています。まだ見ぬ誰かが、顔を上げるきつ  
かけになることを信じ願いながら。